

<学会レポート>

第40回日本医学哲学・倫理学会大会

中澤 武（明海大学）

第40回日本医学哲学・倫理学会大会（オンライン開催）は2021年11月6日（土）・7日（日）の両日、横浜市立大学を主催校として開催された（大会長：有馬 斉）。今回の大会では「医療・権利・制度」をテーマとして、特別講演、ワークショップ、シンポジウムおよび個人研究発表（9件）が実施され、参加者の関心を呼んだ。大会1日目には「医哲Café—コロナ禍のACP—」も開催された。以下では、まず（Ⅰ）シンポジウムの概要を紹介してから、（Ⅱ）特別公演の内容を報告する。

（Ⅰ）大会2日目に行われたシンポジウム「AID（DI）の倫理—出自を知る権利をめぐるこれまでの議論の経緯と今後の課題—」では、非配偶者間人工授精で生まれた子の親子関係を明確にする民法特別法の成立（2020年12月4日）を受けて、AID（Artificial Insemination of Donor sperm、またはDI: Donor Insemination）で生まれた子が遺伝上の親についての情報を得る「出自を知る権利」に関して、医療の現状と法制度をめぐる論点、倫理的問題点などについての報告と集中的な議論があった。

前記の民法特別法によれば、夫婦のうち女性が自分以外の卵子を使って出産した場合には、その卵子の提供者ではなく出産した女性が母となる。また女性が夫以外の精子提供を受けて妊娠・出産した子については、夫は自分の子であることを否認できない。これによって、第三者から精子や卵子の提供を受けて生殖補助医療で生まれた子の親子関係は法的に明確となった。とはいえ、精子・卵子の提供や斡旋、妻以外の女性による代理出産ならびに「出自を知る権利」に関する法整備の在り方については、いずれも今後の検討課題として積み残されたままになっている。

このシンポジウムで特に注目されたのは、横浜市立大学附属病院医師の加藤英明氏が登壇し、AID（以下DI）で生まれた当事者の立場から、DIに関する医療の現況とご自身の経験を語って「DIの議論において最も欠けているのは生まれた子どもからの視点」であり、「子どもの意見をふまえたDIの仕組みの構築が必要」と指摘したことである。また、由井秀樹氏（山梨大学大学院総合研究部医学域社会医学講座・特任教授）は、非配偶者間人工授精のわが国への導入（1948年）から現在に至る制度面・倫理面での論点を整理し、優生学的視点との関連に言及した。さらには、仙波由加里氏が「出自を知る権利」に関連する諸外国の法制度を比較してそれらの特徴を示し、国連「子どもの権利章典」第8条に記された「子どものアイデンティティを保持するための権利」との関連にも触れて、わが国における今後の議論の課題を提示した。

（Ⅱ）大会1日目に行われた特別講演では、「ALSでも社会参加できる—私が社会の思い込みを壊すために取り組んできたこと—」と題して、創発計画株式会社・代表取締役の高野元氏を迎え、ALS療養者としての経験と積極的な社会参加への様々な取り組みについて聴いた。高野氏

は、2014年に ALS との告知を受けてから現在までの療養歴を「絶望」から「理解」を経て「受容」に至る過程として語り、いわゆる終末期に入る以前の「安定期」にある当事者として、「よく生きる」ための葛藤と、それを乗り越えるために実践してきた創意工夫の数々を紹介した。

高野氏は、ご自身を「2016年には胃ろうを作り、2017年には誤嚥防止・気管切開手術を受けており、すでに四肢麻痺で発話不能の最重度の障害者」と紹介された。それにもかかわらず、氏は自身の活動報告会を開いて「怖がる友人たちを啓蒙」し、患者会活動に参加して仲間のつながりを広め、みずから「プレゼンソフト HeartyPresenter」を開発して企業や学校などで講演を続けている。最近では、「分身ロボットカフェ」に分身ロボット OriHime の「パイロット」として参加したり、神奈川県から「共生社会アドバイザー」を委嘱されて分身ロボットを介して会議に参画したりと、社会貢献の幅を広げている。

高野氏のお話は、難病の患者であっても工夫次第で社会参加の機会を「創出」し、「地域に貢献する仕事ができている！」という実感を得ることも可能であることを示している。もちろん、そのためには病状の安定は前提となるが、そのうえで「安定期の尊厳」こそが「終末期の尊厳を作る」という高野氏の活動は療養者と家族に希望を与えるものである。

視線入力と手指のわずかな筋電位だけからパソコンを操作して行う高野氏の講演は、文章表示および画像と音声装置を駆使した興味深く分かりやすい内容であった。また、講演後の質疑応答では、聴衆からの質問を受けて即座に文字入力と音声で答える。そのスピードには驚かされた。高野氏の活動は、まさに ALS 療養者とのコミュニケーションに関して聴衆の「思い込みを壊す」ものとなったのである。

以上（Ⅰ）と（Ⅱ）での報告から分かるとおり、今大会では、医療をめぐる社会の中で当事者の葛藤とそれを乗り越えるための制度と工夫がくりかえし議論の主題となった。日本医学哲学・倫理学会第40回大会の議論は、そうした当事者への視点を活かして再び社会へと打ち返される。今大会の成果を形にした論文の登場にも期待したい。